影テスト作成の試み：影のイメージと性格の関連

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 奥田, 亮, 坂田, 浩之 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4581

影テスト作成の試み

－影のイメージと性格の関連－

奥田　亮・坂田　浩之
臨床心理学専攻准教授・カウンセリングセンター相談員

要約
本研究では，影イメージの描画について予備調査を行い，その結果から「影テスト」が試作された。そして他の心理測定尺度と共に施行・分析し，性格検査として標準化を行った。また，影テストによって個人がどのような影イメージを表出させうるかについて検討したところ，影のイメージに主張性，自律性や主体性，自身の考えや感情・不安，自身が求めている外界の変化や新しい体験，他者性が投映されることが示された。さらに影テストにおいて影 shadow に対する態度も投映されることが示唆された。

キーワード：影 shadow，影テスト，性格，影イメージ，影の描画

Ⅰ　問題・目的

本研究で取りあげる影 shadow とは，Jung, C. G.（以下 Jung）による分析心理学の概念であり，ペルソナ，アニマ，アニムス等と並ぶ，元型 archtype の一つとされている。Jung の著作の中で影についてはたびたび言及されており，例えば「影の像は，主体は認めていないが，それでも何度でも彼に ―― 直接的にしろ間接的にしろ ―― しつこく迫ってくるものすべてを，たとえば劣等な性格特性やその他の［主体と］相容れない性向を，人格化したものである」（Jung，1939/1991），「影ということで，私は人格の「否定的」側面を意味している。それは，十分に開発されてこなかった個人的無意識の内容・機能も含めて，私たちが表に出したがらない不快な性質をもったものの集合である」（Jung，1948/1977；Storr，1983/1997），「この影は誰もが持っている。すなわちそれは人格の劣等な，それゆえ隠された側面であり，あらゆる強さに付きものの弱さ，昼のあとに必ずやってくる夜，善人の悪である」（Jung，1946/1994），等と述べられている。しかし「ユングが影をどのように定義しているかは，簡単なようで案外解りにくい」と河合（1987）は述べ，影 shadow について「弟子たちがあまりにも文字づらに捉われ彼の諸概念にこだわって（中略）それが何を意味するのか理解していないのを（Jung が）嫌がって，あるとき討論している最中に，今までの定義をすべて放り出して，『こいつはすべてナンセンスだ！影とは要するに無意識全体のことなんだ』と言った」エピソードを紹介している（このエピソードは von Franz（1974/1981）に記されている）。そして河合は，影（あるいは Jung の理論の諸概念）について概念上の明確な定義に拘るのでなく，体験から理解するべきであると述べ，影 shadow は「個人に体験されることとしては，まず無意識の全体として体験される」と記している（河合，1987）。実際に Jung の著作では，心理療法や自己実現の過程の中で影 shadow について触れられていることが多く，そのような文脈を抜きにして影 shadow について語ることは，あまり意味のないことだと言えよう。影 shadow は「無意識への門」であり「内面への旅における最初の肝試し」，「もし自分の影を凝視し，影を知ることに耐えることができるならば，

課題の第一歩がまず解決された，少なくとも個人的無意識が取り上げられたのである」「自分自身との出会いはまず自分の影との出会いとして経験される」（Jung，1954/1999）のである。このように，個人が自らの無意識的な心の領域に取り組もうとする時，その自分の無意識的な側面が，影 shadow として姿を現す，いわば個性化のプロセスの導入的な役割を果たす。反対に，影 shadow を無視したり抑え込むことは，心理的な問題につながることを Jung は主張する。「誰もが影を引きずっており，影は，個人の意識生活に統合されていなければいないほど，黒く，色濃くなります」「神経症にまで至ると，わたしたちはきまって，相当に強くなってしまった影に関わりあわねばなりません」（Jung，1938/1989）。とは言え，影 shadow は必ずしも悪いものではない。「わたしが影と呼んでいるところの抑圧された傾向が悪であることに決まっているならば，何の問題もないでしょう。しかし，影は（中略）全面的に悪だというわけではありません。ある意味で，人間存在を活気づけ，美しくするような，劣等で子供っぽくて，原始的な性質さえ持っています」（Jung，1938/1989）。つまり「影は意識に対して補償的に関わるので，その作用は否定的にも肯定的にもなりうる」（Jaffé，1977/1995）のである。このように，自らの影 shadow について考えることは，人格の成熟に向けた一歩であり，個人にとって完全に避けて通ることは難しい問題であると思われる。

影 shadow と出会っていくことの心理的な重要性について述べてきたが，Jung が影 shadow を元型の一つ，としているように，それは日常において当然実際の具体的な「影」そのものではなく，一定のパターンやイメージとして我々の心に生じたり，具現化したりする。よく言われるのは，影 shadow は「夢の人物としては，大抵夢み手と同性」（Jaffé，1977/1995）として現れることである。河合（1987）も，夢に影 shadow が自分とは全く反対の性格，思想，立場や国の（同性の）人物として現れた事例をいくつも描いている。影 shadow は，「通常，正反対であるが，また双子のように身近でもある」（Stein，1998/1999）ので，物語では兄弟や姉妹として個人（自我，ペルソナ）と影 shadow の対のイメージが表現されることもある。

だが，影 shadow が同性・兄弟といった人間の姿ではなくそのまま「影」として出現する物語や言い伝え（例えばある学者が，壁に映った自分の影によって自分の人生を乗っ取られてしまう話，等）も数多くある（河合，1987）。影の現れる著名な物語の一つに，A. K. ル＝グゥイン（Le Guin，1968/1976）の『影との戦い ゲド戦記 I』がある。この物語では，主人公の魔法使いゲドが自らの傲りと妬みの心から生み出した影に追われ，対峙し，やがて一体となるまでの過程が描かれている。すなわちゲド自身の心の影 shadow が，そのまま「影」として描き出された物語と言える。また山中（1996）はユング心理学の観点から，ある心身症の女性に対する絵画療法の中で，その患者がそれまで「生きてこられなかった心の半面」を生きようとし始めた時に，鍵を持った「影」の絵を描き出した事例を紹介している。

山中（1996）の事例のように，影 shadow が「影の絵」として描画で表象化されることもあるものの，上述のように，影 shadow は必ずしも日常我々の傍にいる黒い陰影としてのみ表されるのではなく，同性で自分と正反対の人物として現れ，描かれたりする。よって，影の絵を描くことによってその個人の影 shadow が引き出される，と考えるのは，やや短絡的とも言える。しかしそれでも，自らの無意識的側面を「影」という言葉で表現する以上，影の描画に元型的な影 shadow イメージが含まれ得ることを想定してもよいのではないだろうか。あるいは，もし影をイメージし描くことに，その個人の影 shadow 以外の何かが投映されるとすれば，それが何なのかを調べることも興味深いと思われる。

そこで本研究では影イメージ（の描画）を用いた性格検査「影テスト」を作成し，そこに個人の影 shadow を示唆するような内容が表されるのか，イメージされ（描かれ）た影はどのような性

質を持つのか，について調査し，分析・考察を行うことを目的とする。

Ⅱ　予備調査

目的

影イメージの描画データを集め，それを基に影テストを試作する。

方法

女子短大生 64 名に対して，授業時間内に集団法で，以下の内容の予備調査が行われた。

まず個人の影イメージを描かせるため，壁の前に人が立っている絵が描かれた A4 大の用紙を配布した。そして，「公園の壁にあなたの影が映っています。するとその影に変化が生じ始めます。現れた影はどのようなものか，思い浮かんだイメージを描いてみてください」という内容の教示を行い，用紙に影イメージを描画させた。また，簡潔にその絵の説明を書くように求めた。

結果

64 名の描画を整理した結果，影イメージを弁別するための幾つかのポイントが抽出され，最終的に 7 つの特徴とその特徴に関する反応パターンが次のように分類された。

①影の浮遊（宙に浮いているか）［1. 影は地面に足がついている（着地）／2. 影は宙に浮いている（浮遊）］②影と自分の距離［1. 影が（壁の左側に描かれた）自分から近い／2. 遠い］，③影の大きさ［1. 影の大きさが自分と比べて同程度／2. 大きい］*1，④影の濃さ［1. 影が塗られていない・塗られ方が薄い／2. 濃く塗られている］⑤影の動き［1. 影が上に動く／2. 影が右に動く（自分から遠のく）／3. 左に動く（自分に近づく）／4. 動かない］⑥影の形の変化［1. 影が大きくなる・伸びる（巨大化）／2. 小さくなる・縮む（縮小）／3. 姿勢・ポーズが変わる（姿勢変化）／4. 影の形が漠然としたものになる（漠然化）／5. 影が自分とは別の何かの形になる（異形化）／6. そのまま］，⑦影と自分の関係［1. 影が無関係に勝手に動く（統制不可）／2. 影が一方的に自分に働きかけてくる（被行為）／3. 影と自分がお互いにやりとりできる（相互交流）／4. そのまま］。

このように分類できたことから，影イメージを描かせた時に，これらの特徴のどのパターンに自分の影イメージが当てはまるか選択させること（影イメージを一定の基準から判定すること）は可能であると考えられた。ただし，影のイメージと，その力動的な動きや変化は区別して捉える方が妥当であろうと判断された。そのため，まず壁にただ映った影をイメージして描き（影イメージ描画），次にその影がどのように変化したかをイメージして描かせる（影イメージ変化描画），という方法をとることにした。

以上の内容を踏まえて，影テストが作成された（Figure 1）。

影テストでは，まず影テスト Ⅰ（影イメージ）として，表紙上部に「あるとてもよい天気の日，あなたは公園にやってきました。公園にはあなた以外誰もいません。ふと大きな白い壁の前で，あなたは立ち止まります。太陽の光が射して，あなたの影が壁に映っています。（2 行空白）今あなたの影はどのように映っているでしょうか。（位置・自分との距離・大きさ・濃さなど）。イメージして下さい。」と教示が記されており，回答者はその下にある白い壁の前に人が立っている絵に，思い浮かんだ影イメージを描くよう求められた。そして，次ページの A〜D の 4 つの設問（上記の影イメージの特徴①影の浮遊〜④影の濃さ）について，その影イメージに最も近いもの（①〜④の 1. または 2.）を選択肢から選ぶように求められた。次に，Ⅱ（影変化イメージ）として，「先ほどまで壁に映っていたあなたの影に変化が生じ始めました。（2 行空白）あなたの影はどのように変化したでしょうか。（位置・形・自分との関係など）。イメージして下さい。」という教示が上部にあり，表紙と同様に回答者はその下の絵に，影の変化したイメージを描き込むよう求められた。次ページ以降は特徴⑤・⑥・⑦に関する A〜C の

＊1 自分に比べて極端に小さい影は描かれることが少なかったため，カテゴリに含めなかった。

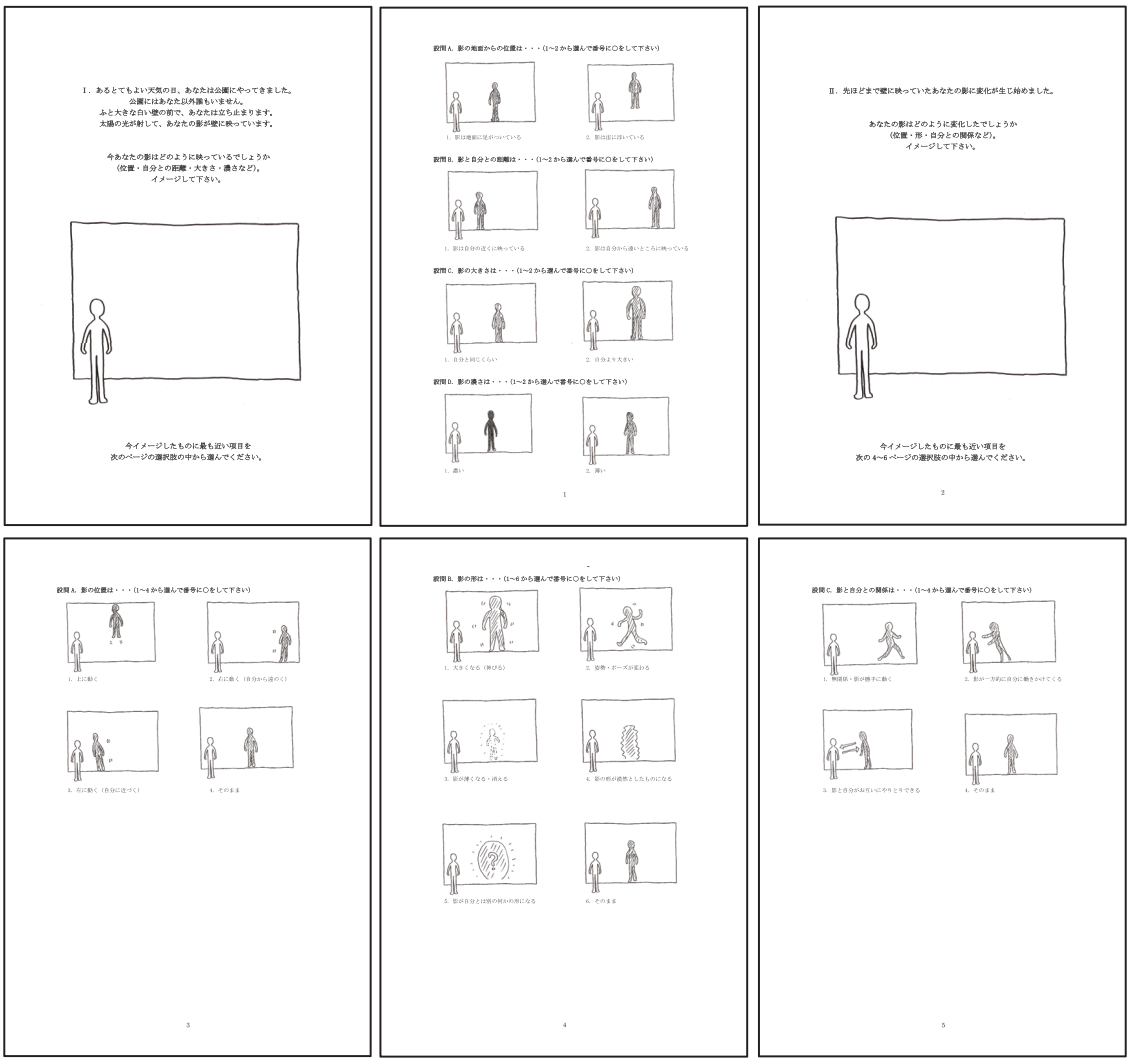

Figure 1　影テスト

3 つの設問について，変化イメージに最も近いものを 4〜6 個の選択肢の中から一つ選ぶよう求められた。

Ⅲ　本調査

目的

試作された影テストを，他の心理測定尺度と共に施行・分析することで，影テストの標準化を行う。また同時に，影テストの刺激（教示および反応用紙の絵，回答様式，等）が，個人にどのような影イメージを表出させうるかについて捉えることを目的とする。

方法

調査対象者は，奈良県の O 女子大学，O 女子短期大学に所属する大学生，短期大学生 252 名であった（平均年齢 19.4 歳，SD＝1.02）。調査対象者に対し，影テストと新性格検査（柳井・柏木・国生，1987）を実施した。新性格検査は，13 の下位尺度（社会的外向性，活動性，共感性，進取性，持久性，規律性，虚構性，自己顕示性，攻撃性，非協調性，劣等感，神経質，抑うつ性）各 10 項目，計 130 項目から構成される尺度である。

調査は 2005 年 7 月，大学の授業時間内で行われた。被調査対象者には口頭で調査目的を説明し，同意できる場合には影テストと新性格検査に回答し提出するよう求めた。

結果と考察

新性格検査下位尺度得点の算出

新性格検査に関しては，柳井・柏木・国生（1987）において信頼性，国生・柳井・柏木（1990）において妥当性が確認されている。また，各下位尺度に関して Cronbach の α 係数を算出したところ，「虚構性」以外は α ＝.88〜.73 という十分な値が示され，「虚構性」に関しても許容範囲であると判断された。そこで，柳井・柏木・国生（1987）に倣い，各下位尺度得点を算出した。新性格検査各下位尺度の平均値，標準偏差，α 係数を Table 1 に示す。

Table 1　新性格検査各下位尺度の基本統計量および α 係数

	M	*SD*	α 係数
社会的外向性	32.32	7.79	.88
活動性	28.97	6.79	.80
共感性	34.25	5.48	.73
進取性	32.10	6.50	.77
持久性	31.13	6.96	.85
規律性	29.35	7.31	.79
虚構性	21.05	5.31	.68
自己顕示性	31.40	7.17	.82
攻撃性	31.08	6.43	.77
非協調性	28.19	6.37	.78
劣等感	31.94	6.63	.78
神経質	35.48	7.66	.85
抑うつ性	35.31	7.54	.85

影のイメージと性格の関連の検討

次に，影テストにおける回答と性格特性との関連を検討した。まず，影テストの各質問に対する回答として選んだ選択肢によって群分けを行った。その上で，質問ごとに各群の新性格検査各下位尺度得点の平均値を算出した。そして，影テスト I（影イメージ）における各質問に関しては t 検定により，2 枚目の影テストにおける各質問に関しては分散分析により，群間差が認められるか調べた。以下にその結果を示す。

1）影テスト I（影イメージ）

設問 A　影の浮遊（宙に浮いているか）

影の地面からの位置に関する質問に関して，「影は地面に足がついている」（着地）を選んだ者と「影は宙に浮いている」（浮遊）を選んだものとの新性格検査各下位尺度得点を比較した。その結果を Table 2 に示す。すなわち，虚構性と劣等感に関して有意差が認められた。そして，「浮遊」を選択した者のほうが，「着地」を選択した者よりも 10%水準で有意に虚構性が高かった（$t(248)=1.96$, $p<.10$）。また，「着地」を選択した者のほうが「浮遊」を選択した者よりも 10%水準で劣等感が高かった（$t(244)=1.82$, $p<.10$）。なお，「着地」を選択した者が 216 名，「浮遊」を選択した者が 36 名で，圧倒的に「着地」を選択した者が多かった。

Table 2　影の自分からの位置による新性格検査各下位尺度得点の差の検討

	着地		浮遊		
	M	*SD*	*M*	*SD*	*t* 値
社会的外向性	32.11	(7.85)	34.09	(7.31)	1.38
活動性	28.88	(6.79)	29.88	(6.86)	0.80
共感性	34.08	(5.63)	35.45	(4.37)	1.34
進取性	31.92	(6.56)	33.34	(6.07)	1.21
持久性	31.00	(6.84)	32.18	(7.92)	0.90
規律性	29.18	(7.47)	30.20	(6.41)	0.76
虚構性	20.79	(5.18)	22.69	(5.96)	1.96 †
自己顕示性	31.22	(7.19)	32.77	(7.10)	1.19
攻撃性	31.01	(6.44)	31.21	(6.27)	0.17
非協調性	28.04	(6.53)	29.09	(5.47)	0.89
劣等感	32.22	(6.77)	30.03	(5.56)	1.82 †
神経質	35.33	(7.82)	36.20	(6.81)	0.62
抑うつ性	35.44	(7.70)	34.49	(6.68)	0.69

† $p<.10$

この結果は次のように解釈できる。影テストにおいて宙に浮いた影をイメージする者は，現実検討力が弱く，自分を実際よりも良く認知しがちで，

「地に足がついてない」や「舞い上がっている」と表現できる性格である。一方，地面に足がついた影をイメージする者は，「地に足がついた」と表現できるように，自分の良いところも悪いところも現実的に認知するために，人より劣った自分も目について，劣等感を抱きがちである。

設問 B　影との距離

影と自分との距離に関する質問に関して，「影は自分の近くに映っている」（近い）を選んだ者と「影は自分から遠いところに映っている」（遠い）を選んだ者との新性格検査各下位尺度得点を比較した。その結果を Table 3 に示す。すなわち，虚構性と自己顕示性に関して有意差が認められた。そして，「遠い」を選択した者のほうが，「近い」を選択した者よりも 10％水準で有意に虚構性が高かった（$t(249)=1.67$, $p<.10$）。また，「近い」を選択した者のほうが「遠い」を選択した者よりも 10％水準で有意に自己顕示性が高かった（$t(245)=1.72$, $p<.10$）。

Table 3　影と自分との距離による新性格検査各下位尺度得点の差の検討

	近い		遠い		
	M	*SD*	*M*	*SD*	*t*値
社会的外向性	32.10	(7.95)	33.11	(6.86)	0.79
活動性	29.04	(6.98)	28.50	(5.85)	0.48
共感性	34.35	(5.36)	33.89	(6.09)	0.50
進取性	32.09	(6.48)	32.00	(6.66)	0.08
持久性	31.31	(7.03)	30.35	(6.71)	0.82
規律性	29.37	(7.36)	29.27	(7.20)	0.08
虚構性	20.80	(5.27)	22.27	(5.45)	1.67 †
自己顕示性	31.71	(7.09)	29.65	(7.24)	1.72 †
攻撃性	31.00	(6.55)	31.47	(5.97)	0.43
非協調性	27.99	(6.27)	29.02	(6.86)	0.97
劣等感	31.99	(6.70)	31.61	(6.44)	0.34
神経質	35.63	(7.33)	34.89	(9.13)	0.58
抑うつ性	35.25	(7.38)	35.43	(8.38)	0.14

†$p<.10$

この結果は次のように解釈できる。影のイメージが，鏡に映った自分の姿のように扱われている。したがって，影が自分の近くにあるとイメージする者は，鏡を近くでよく見る者のように，自己愛が強い一方，自分のことをよく見て，現実の自分を認知している。

設問 C　影の大きさ

影の大きさに関する質問に関して，「自分と同じくらい」（同じ）を選んだ者と「自分より大きい」（大きい）を選んだ者との新性格検査各下位尺度得点を比較した。その結果を Table 4 に示す。すなわち，攻撃性と非協調性に関して有意差が認められた。そして，「大きい」を選択した者のほうが，「同じ」を選択した者よりも 5％水準で有意に攻撃性が高かった（$t(245)=2.26$, $p<.05$）。また，「大きい」を選択した者のほうが「同じ」を選択した者よりも 1％水準で有意に非協調性が高かった（$t(248)=2.80$, $p<.01$）。

Table 4　影の大きさによる新性格検査各下位尺度得点の差の検討

	同じ		大きい		
	M	*SD*	*M*	*SD*	*t*値
社会的外向性	31.65	(7.82)	33.16	(7.70)	1.53
活動性	28.81	(6.75)	29.17	(6.86)	0.42
共感性	34.42	(4.88)	34.04	(6.17)	0.55
進取性	31.67	(6.57)	32.63	(6.41)	1.17
持久性	31.54	(7.20)	30.62	(6.65)	1.04
規律性	28.98	(7.43)	29.82	(7.15)	0.91
虚構性	21.06	(5.20)	21.03	(5.47)	0.06
自己顕示性	31.53	(7.11)	31.23	(7.27)	0.32
攻撃性	30.26	(6.18)	32.11	(6.61)	2.26 *
非協調性	27.21	(5.72)	29.45	(6.94)	2.80 **
劣等感	31.91	(6.46)	31.97	(6.87)	0.07
神経質	35.22	(7.59)	35.79	(7.76)	0.59
抑うつ性	35.28	(7.29)	35.34	(7.87)	0.06

*$p<.05$, **$p<.01$

この結果は次のように解釈できる。影のイメージに，主張性が投映されている。したがって，大きな影をイメージする者は，「我が強い」と表現できるように，自己主張が強く，好き嫌いが激しく，協調性が低い。一方，小さな影をイメージする者は，自己主張するよりも周りとの調和性を大切にする。

設問 D　影の濃さ

影の濃さに関する質問に関して，「濃い」を選

んだ者と「薄い」を選んだ者との新性格検査各下位尺度得点を比較した。その結果を Table 5 に示す。すなわち，進取性と規律性に関して有意差が認められた。そして，「濃い」を選択した者のほうが，「薄い」を選択した者よりも 1 %水準で有意に進取性が高かった（$t(248)=2.76$, $p<.01$）。また，「濃い」を選択した者のほうが「薄い」を選択した者よりも 5 %水準で有意に規律性が高かった（$t(248)=2.43$, $p<.05$）。

Table 5　影の濃さによる新性格検査各下位尺度得点の差の検討

	濃い		薄い		
	M	*SD*	*M*	*SD*	*t*値
社会的外向性	32.79	(7.74)	31.90	(7.87)	0.90
活動性	29.62	(6.67)	28.33	(6.89)	1.50
共感性	34.74	(5.71)	33.82	(5.24)	1.32
進取性	33.25	(6.36)	31.01	(6.50)	2.76 **
持久性	31.85	(7.21)	30.46	(6.69)	1.58
規律性	30.48	(7.65)	28.26	(6.85)	2.43 *
虚構性	21.10	(5.15)	20.98	(5.50)	0.17
自己顕示性	32.03	(7.19)	30.83	(7.15)	1.32
攻撃性	31.57	(6.20)	30.57	(6.65)	1.22
非協調性	28.28	(6.22)	28.09	(6.55)	0.24
劣等感	31.64	(7.01)	32.26	(6.27)	0.73
神経質	35.29	(7.97)	35.71	(7.38)	0.44
抑うつ性	35.02	(7.78)	35.63	(7.32)	0.63

* $p<.05$, ** $p<.01$

この結果は次のように解釈できる。影のイメージに，自律性や主体性が投映されている。したがって，濃い影をイメージする者は，自律性が強く，計画的に物事を進めることや整理整頓が好きであり，また，自ら進んで新しい物事にチャレンジする。一方，薄い影をイメージする者は，いつも通りのことを，いつも通りに行うのを好む，ある意味「影が薄い」人物である。

2）影テストⅡ（影変化イメージ）

設問 A　影の位置の変化

影の位置の変化に関する質問に関して，「上に動く」（上）を選んだ者，「右に動く（自分から遠のく）」（右）を選んだ者，「左に動く（自分に近づく）」（左），「そのまま」を選んだ者の新性格検査各下位尺度得点を比較した。各群の新性格検査各下位尺度得点を Table 6 に，各群の差を分散分析によって検討した結果を Table 7 に示す。すなわち，攻撃性と神経質に関して 10%水準で有意差が認められた（攻撃性：$F(4, 231)=2.11$, $p<.10$，神経質：$F(4, 235)=2.11$, $p<.10$）。そして，事後の多重比較（Tukey 法）の結果，「そのまま」を選択した者のほうが，「右」を選択した者よりも 10%水準で有意に攻撃性と神経質が高かった。

Table 6　影の位置の変化に関する回答により群分けした各群の新性格検査各下位尺度得点

	上		下		右		左		そのまま	
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
社会的外向性	33.62	(7.07)	33.07	(9.23)	32.46	(7.83)	33.06	(7.90)	30.97	(7.50)
活動性	29.46	(6.21)	30.14	(7.83)	28.88	(6.78)	30.55	(6.46)	27.69	(6.88)
共感性	34.96	(4.59)	33.68	(5.26)	34.09	(6.28)	34.73	(4.45)	34.24	(5.48)
進取性	33.35	(5.12)	30.79	(7.48)	32.57	(6.64)	33.94	(6.24)	30.80	(6.43)
持久性	30.42	(7.10)	32.07	(9.05)	31.02	(6.62)	31.58	(7.21)	30.56	(6.75)
規律性	29.46	(7.22)	29.83	(8.19)	28.38	(7.38)	30.73	(7.30)	29.46	(7.04)
虚構性	21.92	(6.37)	21.28	(5.98)	20.88	(4.79)	20.12	(4.35)	21.02	(5.99)
自己顕示性	30.96	(6.88)	30.21	(8.27)	31.14	(7.23)	33.23	(6.77)	31.71	(6.89)
攻撃性	31.40	(5.82)	31.29	(5.49)	29.72	(6.70)	32.59	(6.31)	32.37	(6.58)
非協調性	26.12	(6.80)	28.25	(6.11)	27.57	(6.15)	29.09	(6.97)	29.78	(6.26)
劣等感	31.35	(6.07)	31.38	(6.61)	32.20	(6.63)	31.42	(7.58)	33.00	(6.38)
神経質	34.08	(8.94)	34.62	(7.12)	34.78	(7.53)	34.73	(8.97)	37.92	(6.33)
抑うつ性	34.38	(9.32)	34.72	(7.38)	34.49	(7.65)	35.55	(7.36)	37.29	(6.25)

この結果は次のように解釈できる。影のイメージに，自身の考えや感情・不安が投映されている。したがって，影が自分から遠のくことをイメージする者は，自分の考えや感情，不安から離れ，これらを和らげることができる。

Table 7　影の位置の変化による新性格検査各下位尺度得点の差の検討

	F 値	多重比較（Tukey法）
社会的外向性	0.76	
活動性	1.19	
共感性	0.26	
進取性	1.88	
持久性	0.32	
規律性	0.72	
虚構性	0.44	
自己顕示性	0.78	
攻撃性	2.11 †	そのまま＞右†
非協調性	1.96	
劣等感	0.52	
神経質	2.11 †	そのまま＞右†
抑うつ性	1.47	

†p <.10

設問 B　影の形の変化

影の形の変化に関する質問に関して，「大きくなる（伸びる）」（巨大化）を選んだ者，「小さくなる（縮む）」（縮小）を選んだ者，「姿勢・ポーズが変わる」（姿勢変化）を選んだ者，「影の形が漠然としたものになる」（漠然化）を選んだ者，「影が自分とは別の何かの形になる」（異形化）を選んだ者，「そのまま」を選んだ者の新性格検査各下位尺度得点を比較した。各群の新性格検査各下位尺度得点を Table 8 に，各群の差を分散分析によって検討した結果を Table 9 に示す。すなわち，共感性と進取性に関して有意差が認められた（共感性：$F(6, 241) = 2.25$，$p < .05$，進取性：

Table 9　影の形の変化による新性格検査各下位尺度得点の差の検討

	F 値	多重比較（Tukey法）
社会的外向性	0.58	
活動性	0.24	
共感性	2.25 *	
進取性	3.17 **	姿勢変化＝漠然化＞そのままそのまま*
持久性	1.34	
規律性	0.49	
虚構性	1.34	
自己顕示性	1.07	
攻撃性	0.90	
非協調性	0.30	
劣等感	0.60	
神経質	0.71	
抑うつ性	0.46	

*p <.05, **p <.01

Table 8　影の形の変化に関する回答により群分けした各群の新性格検査各下位尺度得点

	巨大化		縮小		姿勢変化		薄化消失		漠然化		異形化		そのまま	
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
社会的外向性	32.22	(7.63)	33.72	(7.62)	30.79	(8.67)	32.71	(7.14)	32.58	(7.66)	34.78	(8.38)	32.22	(7.90)
活動性	28.25	(6.31)	30.25	(7.57)	28.51	(7.41)	31.19	(5.75)	31.17	(7.09)	30.00	(6.73)	27.81	(6.58)
共感性	34.08	(5.14)	32.61	(5.32)	34.97	(6.20)	35.18	(6.71)	36.50	(3.51)	37.30	(3.80)	33.15	(5.63)
進取性	32.27	(6.53)	30.69	(7.58)	34.18	(5.95)	30.82	(5.35)	34.58	(5.51)	35.20	(5.88)	29.72	(6.29)
持久性	30.25	(7.15)	30.90	(7.44)	31.69	(8.17)	29.53	(6.50)	35.79	(6.30)	31.90	(6.14)	30.30	(5.00)
規律性	28.44	(7.15)	29.78	(6.36)	29.46	(7.83)	29.00	(9.98)	29.58	(6.81)	32.10	(8.43)	29.74	(6.92)
虚構性	20.79	(5.12)	20.44	(4.46)	22.21	(6.03)	18.82	(5.02)	21.25	(4.55)	23.70	(8.49)	21.21	(5.12)
自己顕示性	31.28	(7.31)	33.78	(7.88)	30.79	(7.37)	29.88	(6.34)	30.46	(5.35)	33.90	(7.25)	30.83	(7.39)
攻撃性	31.30	(5.84)	30.74	(6.95)	29.21	(6.27)	31.59	(5.94)	30.83	(7.50)	33.50	(5.56)	31.76	(7.00)
非協調性	28.11	(6.85)	28.52	(6.24)	28.49	(6.58)	27.24	(4.66)	27.00	(5.55)	27.10	(6.92)	28.55	(6.02)
劣等感	32.66	(6.68)	31.38	(5.79)	32.54	(7.74)	32.00	(7.11)	30.08	(6.23)	30.80	(8.73)	31.84	(5.82)
神経質	35.61	(8.18)	34.22	(7.21)	35.03	(8.11)	35.29	(7.49)	35.00	(8.15)	39.70	(5.93)	35.83	(6.90)
抑うつ性	34.89	(7.84)	35.91	(7.73)	35.44	(8.84)	35.24	(6.65)	35.58	(7.52)	38.40	(4.20)	34.43	(6.66)

$F(6, 242)=3.17$, $p<.01$)。そして，事後の多重比較（Tukey 法）の結果，「姿勢変化」を選択した者，「漠然化」を選択した者のほうが，「そのまま」を選択した者よりも 5 %水準で有意に進取性が高かった。共感性に関しては，有意な群間差は認められなかった。

この結果は次のように解釈できる。影のイメージに，自身が求めている外界の変化や新しい体験が投映されている。したがって，影が姿勢・ポーズを変えることをイメージしたり，影の形が漠然としたものに変わることをイメージしたりする者は，新奇性や変化を好み，自分から進んで新しいことにチャレンジする。

設問 C　影と自分の関係の変化

影と自分の関係の変化に関する質問に関して，「無関係・影が勝手に動く」（統制不可）を選んだ者，「影が一方的に自分に働きかけてくる」（被行為）を選んだ者，「影と自分がお互いにやりとりできる」（相互交流）を選んだ者，「そのまま」を選んだ者の新性格検査各下位尺度得点を比較した。各群の新性格検査各下位尺度得点を Table 10 に，各群の差を分散分析によって検討した結果を Table 11 に示す。すなわち，社会的外向性，活動性，進取性，持久性，非協調性，劣等感，抑うつ性に関して 5 %水準で有意差が認められた（社会的外向性：$F(3, 246)=3.57$，活動性：$F(3, 244)=3.14$，進取性：$F(3, 247)=3.78$，持久性：$F(3, 246)=2.94$，非協調性：$F(3, 246)=2.70$，劣等感：$F(3, 244)=3.15$，抑うつ性：$F(3, 248)=2.78$; いずれも $p<.05$)。また，虚構性と神経質に関して，10%水準で有意差が認められた（虚構性：$F(3, 248)=2.29$，神経質：$F(3, 247)=2.59$; ともに $p<.10$）そして，事後の多重比較（Tukey 法）の結果，次のような有意な群間差が認められた。すなわち，「相互交流」を選択した者のほうが，「そのまま」を選択した者よりも 5 %水準で有意に社会的外向性，活動性，持久性が高かった。「統制不可」を選択した者のほうが，「そのまま」を選択した者よりも 5 %水準で有意に進取性が高かった。「相互交流」を選択した者のほうが，「被行為」を選択した者よりも 10%水準で有意に社会的外向性，活動性，虚構性が高かった。「そのまま」を選択した者のほうが，「相互交流」を選択した者よりも 10%水準で有意に非協調性，劣等感，神経質，抑うつ性が高かった。「被行為」を選択した者のほうが，「相互交流」を選択した者よりも 10%水準で有意に劣等感が高かった。

この結果は次のように解釈できる。影のイメージに，他者性が投映されている。したがって，影と相互交流できることをイメージする者は，影と

Table 10　影と自分の関係の変化に関する回答により群分けした各群の新性格検査各下位尺度得点

	統制不可		被行為		相互交流		そのまま	
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
社会的外向性	33.24	(7.98)	29.72	(6.00)	34.06	(8.08)	31.05	(7.54)
活動性	28.63	(7.03)	27.00	(7.41)	30.62	(7.13)	28.04	(5.94)
共感性	34.21	(5.87)	35.16	(5.51)	35.09	(5.32)	33.26	(5.37)
進取性	34.37	(7.35)	32.71	(5.84)	32.65	(6.16)	30.56	(6.36)
持久性	31.26	(7.35)	30.52	(7.74)	32.70	(6.69)	29.75	(6.64)
規律性	28.03	(7.06)	29.48	(7.29)	30.68	(7.73)	28.58	(6.89)
虚構性	21.32	(6.46)	18.84	(3.80)	21.85	(5.24)	20.77	(5.10)
自己顕示性	31.34	(7.05)	31.67	(6.99)	31.33	(7.27)	31.41	(7.27)
攻撃性	31.19	(7.39)	33.60	(6.75)	30.30	(6.05)	31.11	(6.22)
非協調性	28.19	(5.83)	29.64	(6.94)	26.77	(6.38)	29.13	(6.25)
劣等感	32.22	(7.36)	33.92	(6.95)	30.33	(6.26)	32.80	(6.38)
神経質	34.53	(8.99)	37.36	(7.81)	34.07	(7.30)	36.69	(7.19)
抑うつ性	35.39	(9.14)	37.32	(6.82)	33.62	(7.76)	36.33	(6.56)

Table 11　影と自分の関係の変化による新性格検査各下位尺度得点の差の検討

	F 値	多重比較（Tukey法）
社会的外向性	3.57 *	相互交流＞そのまま *，相互交流＞被行為†
活動性	3.14 *	相互交流＞そのまま *，相互交流＞被行為†
共感性	2.02	
進取性	3.78 *	統制不可＞そのまま *
持久性	2.94 *	相互交流＞そのまま *
規律性	1.79	
虚構性	2.29 †	相互交流＞被行為†
自己顕示性	0.01	
攻撃性	1.74	
非協調性	2.70 *	そのまま＞相互交流†
劣等感	3.15 *	そのまま=被行為＞相互交流†
神経質	2.59 †	そのまま＞相互交流†
抑うつ性	2.78 *	そのまま＞相互交流†

† p <.10, * p <.05

の関係が変わらないイメージを持つ者と比べ，他者とのやりとりや自分の思い通りにならないことへの対応に自信があり，外向性や協調性，活動性が高く，劣等感や抑うつ・不安が低い。同様に，影から一方的に働きかけられるイメージを持つ者と比べても，影と相互交流できることをイメージする者は，外向性や活動性が高く，劣等感が低い。また，影と相互交流できることをイメージする者は，影から一方的に働きかけられるイメージを持つ者と比べると，自分の対人関係や現実対処の能力を実際よりも高く認知している。影が自分とは無関係に，勝手に動き出すことをイメージする者は，影との関係が変わらないイメージを持つ者と比べ，外界や自分の内なる他者性への許容度が高く，新奇性や変化を好み，自分から進んで新しいことにチャレンジする。

Ⅳ　総合考察

本研究において，壁に映る自分の影をどのようにイメージするかということと，性格特性との間に関連が認められることが示された。またその影がどのように変化するとイメージするかということと，性格特性との間にも関連が認められることが示された。これらの結果を踏まえるならば，本研究において開発を試みた「影テスト」を，性格検査として用いることが可能である。「影テスト」は，質問項目数が少なく，簡便である点，どのような性格をはかられているのか分かりにくく，回答の意識的な方向づけが難しいという投映法の長所を備えている点において，実用性の高い性格検査だと言える。

また，本研究の結果から，人は壁に映る自身の影のイメージに対して，主張性，自律性や主体性，自身の考えや感情・不安，自身が求めている外界の変化や新しい体験，他者性を投映することが示唆された。これを踏まえると，壁に映った影のイメージに投映された内容に，Jung の影 shadow の概念に内包される無意識や劣等な性格特性というニュアンスは乏しく，むしろ壁に映し出された“鏡像的な自分自身”である影とどのように関わるかが投映されていると言えそうである。あるいは，劣等感や進取性との関連が認められた部分に限って言えば，影のイメージが影 shadow に開かれた性格を表現する場合があることを意味していると考えられる。地面に足がついている影（宙に浮いていない影）をイメージする者は，「私たちが表に出したがらない不快な性質をもったものの集合」（Jung，1948/1977；Storr，1983/1997）である影 shadow の存在に気づいているから劣等感を感じやすいのだと考えられる。あるいは，濃い影をイメージする者は，無意識であり，「人間存在を活気づけ，美しくするような，劣等で子供っぽくて，原始的な性質」（Jung，1938/1989）を持つ影 shadow の影響に開かれ，関心を持つために進取性が高いのだと考えられる。このように，本研究において，影のイメージに何が投映されるのかが具体的に示されたこと，また影のイメージに影 shadow に対する態度が投映されることが示唆されたことは，心理臨床において表現される影のイメージを理解し，心理療法に役立てる上で意義がある。

Ⅴ　今後の課題

本研究の限界と今後の課題は次の通りである。すなわち，本研究のサンプルは，大学生・短期大学生女子のみであった。したがって，異なる年齢層や，男性に関しては，本研究の知見がそのまま

当てはまらない可能性がある。「影テスト」を様々な年齢層の男女に実施できる性格検査とするためには，さらなる検討が必要である。

また，本研究では，「影テスト」と新性格検査（柳井・柏木・国生，1987）の関連から「影テスト」において人が影のイメージに投映するものと，Jung の影 shadow の概念との関連性について検討した。しかし，質問紙法によって測定される意識的な性格特性から無意識である影 shadow との関連を探ることには限界がある。たとえば，夢の内容など，影 shadow の働きをより直接的に捉えられる方法を用いて影テストとの関連を検討するなど，さらなる検討が求められる。

文献

Jaffé, A.（1977）. C. G. Jung: *Bild und Wort*. Olten: Walter−Verlag AG,. 氏原　寛（訳）（1995）. ユング――そのイメージとことば. 誠信書房.

Jung, C. G.（1938）. *Psychology and religion*. New Haven and London: Yale University Press. 村本詔司（訳）（1989）. 心理学と宗教. 人文書院.

Jung, C. G.（1939）. *Zentralblatt für Psychotherapie und ihre Grenzgebiete XI−5*. Leipzig, pp. 257−270. 林　道義（訳）（1991）. 個性化とマンダラ. みすず書房.

Jung, C. G.（1946）. *Die Psychologie der Übertragung, CW16*. Zürich: Rascher Verlag. 林　道義・磯上恵子（訳）（1994）. 転移の心理学. みすず書房.

Jung, C. G.（1948）. *Über die Psychologie des Unbewußten*. Zürich. 高橋義孝（訳）（1977）. 無意識の心理. 人文書院.

Jung, C. G.（1954）. *Über die Archetypen des kollektiven Unbewußten, CW9i*. Zürich: Rascher Verlag. 林　道義（訳）（1999）. 元型論. 紀伊國屋書店.

河合隼雄（1987）. 影の現象学. 講談社.

国生理枝子・柳井晴夫・柏木繁男（1990）. 新性格検査における併存的妥当性の検証――プロマックス回転法による新性格検査の作成について（Ⅱ）. 心理学研究, **61**, 31−39.

Le Guin, U. K.（1968）. *A wizard of Earthsea*. Berkeley, California: Parnassus Press. 清水真砂子（訳）（1976）. 影との戦い――ゲド戦記Ⅰ. 岩波書店.

Stein, M.（1998）. *Jung's map of the soul: An introduction*. Carus Publishing Company. 入江良平（訳）（1999）. ユング　心の地図. 青土社.

Storr, A.（1983）. *The Essential Jung*. Princeton University Press. 山中康裕（監訳）（1997）. エッセンシャル・ユング――ユングが語るユング心理学. 創元社

von Franz, M. L.（1974）. *Shadow and Evil in Fairy Tales*. Spring Publications. 氏原　寛（訳）おとぎ話における影. 人文書院.

山中康裕（1996）. 臨床ユング心理学入門. PHP 研究所.

柳井晴夫・柏木繁男・国生理枝子（1987）. プロマックス回転法による新性格検査の作成について（I）. 心理学研究, **58**, 158−165.